

『ある娘の物語』あるいは『しのび声』について

長 野 俊 一

序

周知のように、ペテロパーヴロフスカヤ要塞の半月堡やシベリアの流刑地の苛酷な条件下にあっても、衰え果てるどころか、いやまして異常な緊張と高まりを示したチェルヌィンシェーフスキイ (Н. Г. Чернышевский) の——とくに物語作家としての——創作エネルギーは、テーマ・題材構成・ジャンル・語りの手法などの深化と多様性を特色とする夥しい数の作品群を生み出した。しかし、1877年にロンドンで一部が匿名出版された長編小説『プロローグ』《Пролог》を除けば、これらの諸作品は、作家の生前ついにロシアの読者の目に触れる機会をもちえなかったがゆえに、「チェルヌィンシェーフスキイは幾世代もの読者にとってただ一編のロマン『何をなすべきか?』《Что делать?》のこと——長野]の作者にすぎなかった¹⁾ という不幸な歴史を背負うことになる。そればかりか、この不幸な歴史はわが国を含む諸外国は言うにおよばず、ロシア・ソヴェートのチェルヌィンシェーフスキイ研究が歩んできた道に暗い影を落している。「チェルヌィンシェーフスキイの生涯のこの時期の芸術作品は研究者たちの広汎な注意を引かなかった、またシベリア時代の諸作品は、『プロローグ』を例外として、ほんのひと握りの専門家に知られているだけであると認めざるをえない²⁾」のである。

こうした作品のひとつに中編小説『ある娘の物語』《История одной девушки》あるいは『しのび声』《Тихий голос》がある。文学史上、不当にも、ほとんど抹殺された作品である³⁾。だが、文学史に指定席を占めることと作品の本質的価値とは本来無縁なはずである。一方、「知られざる」作品の形式的復権のみに拘泥していてもその本質を解明することになるまい。言うまでもないことであるが、個別に任意の芸術的構造を分析する場合、例えばユー・ロートマン (Ю. М. Лотман) が事あるごとに発言しているように、所与の構造をそれを含む諸体系から挽ぎ離してはならない⁴⁾。すぐれて独自の小説作法を

- 1) Руденко Ю. К. Чернышевский-художник. 《Русская литература》, Л., 1978, № 3, с. 175.
- 2) Коновалов В. Н. Повесть Н. Г. Чернышевского 《История одной девушки》 и русская литература 60-х годов XIX века. М., 1969, с. 4.
- 3) См.: История русской литературы в 4-х томах. т. 3, Л., 1982. Чернышевский и 60~70-х годов年代的記述にかなりのページが割かれているにもかかわらず、『ある娘の物語』についてはわずかに一箇處、それもゆきずりに言及されるにとどまる。
- 4) Лотман Ю. М. Литературоведение должно быть наукой. 《Вопросы литературы》, М., 1967, № 1. с. 90-100.
なお、以下の邦訳書を参照されたい。
Yu. ロートマン『文学と文化記号論』(磯谷孝編訳)、岩波書店、1979年。
Yu. M. ロートマン『文学理論と構造主義』(磯谷孝訳)、勁草書房、1978年。

もつチェルヌィシエーフスキイの作品分析に際しては、彼の思想的・文学的体系の全体のみならず、先行する時代および同時代のそれをもつねに視野に収めておく必要がある。

中編小説『ある娘の物語』あるいは『しのび声』はチェルヌィシエーフスキイの創作活動において特別の位置を占めつつ、さまざまなレベルで作家の他の作品群ばかりでなく同時代の文学的潮流とも密接に関連している。しかも、ほとんどが未完に終わったシベリア時代の著作のなかで、幸いなことに唯一完全な形で残されている作品であるだけに、作家チェルヌィシエーフスキイの全貌を明らかにするには、その研究が不可欠であると思われる。

そこで以下、本稿ではテキストの異同に関してまず検討を加え、規範となるべきテキストを確定したうえで、作品の内容分析を試みることにする。

1. テキストの異同をめぐって

1860年代末にシベリアの流刑地アレクサンドロフスキイ工場で脱稿された『ある娘の物語』あるいは『しのび声』は、久しくチェルヌィシエーフスキイの従弟パイピン(A. H. Пыпин)のアルヒーフに眠っていた。それが世に出たのは1906年、最初のチェルヌィシエーフスキイ全集(全10巻)の第10巻においてである。その後1949年、小説は現在のところ作家の決定版全集となっている16巻全集(1939~1953)第13巻に再録されるが、二つのテキストの間には著しい異同があった。さらに、1978年、作家生誕150周年を記念して刊行された作品選集第3巻のテキストと1949年版との間にも、筆者が確認した限り、細部に関するものだけでも1,000箇所以上の異同が見受けられる⁵⁾。

ここで問題とすべきは、細部の異同——句読点、引用符やダッシュ、綴字、新旧正字法などに関するもの——ではなく、作品のテーマ群、構成、主人公の性格付けを大きく左右する決定的な異同についてである。どの版を規範的とみなすかによって作品の形式も内容もおおいに変わってしまう。したがって、われわれは何よりもまずこの問題を検討したうえで、具体的分析に向わなければならない。

そもそも、1906年版と1949年版とでは作品名そのものが異なっている。前者は『しのび声』、後者は『ある娘の物語』と題されている。しかも、「この差異は編集者の誤謬あるいは不注意の結果ではなく、本質的特徴をそなえている」⁶⁾。1949年版『ある娘の物語』——女主人公リーザ(Лизавета Арсеньевна Свилина)が一人称で語りつづける回想録も

5) 本文批評については同作品集第3巻の註に詳しい。

Чернышевский Н. Г. Избранные произведения в 3-х томах. т. 3, Л., 1978, с. 495-497.

6) Коновалов В. Н. Из истории написания и публикации повести Н. Г. Чернышевского «Тихий голос» («История одной девушки»). «Ученые записки Московского пединститута», № 288, М., 1968, с. 281.

しくは手記の体裁をとる——は形式的にも内容的にもより複雑な1906年版『しのび声』の一部である。『ある娘の物語』には、「ソフィヤ書から」⁷⁾〈Из Книги Софьи〉という傍題の付された『しのび声』の骨組に相当する部分——以下仮に「外挿部」と呼ぶことにする——が本文から完全に脱落している。それは、a)『ある娘の物語』に先立つ「第一夜」と名付けられた冒頭部、b)第1章第6節と第7節の間の挿入部、c)第2章の冒頭部、d)「ここで原稿は終わっている……」に先立つ結末部である。ひとまずa)～d)の内容を略述しておこう。

『しのび声』はリーザの告白録をペテルブルグの文学者グループが読むという状況設定になっている。ある夫妻の家庭の居間で、リーザが雑誌に掲載してもらおうべく持込んだ手記の朗読が行なわれ、居合せた作家や批評家が手記をめぐる文学上の、あるいは倫理上の問題に関する論争を展開する。他方、家庭の主婦ソフィア(Софья Васильевна)の口から、手記つまり『ある娘の物語』で中断されたリーザのその後の生活、精神的・肉体的危機を経た彼女の後日譚が語り伝えられる。かくして、リーザの物語の世界とその「読者=批評家」の世界を交錯させることによって小説世界が空間的の拡がりをもつ。と同時に、物語の緩慢な時間の流れ、物語の〈そのとき〉というタテ糸に、「読者=批評家」の凝縮、緊張した時間の流れ、〈いま〉というヨコ糸を織重ねることによって小説世界が時間的の拡がりをも獲得し、構造化される。なお、ついでに付け加えておこなう朗読が行なわれる家庭の夫妻がチェルヌィシェーフスキイとその妻オーリガ(Ольга Сократовна)、若い批評家ブラゴダーツキイ(Благодатский)がドブロリューポフ(Н. А. Добролюбов)、作家オヌーフリェフ(Онуфриев)が『オブローモフ』《Обломов》の作者ゴンチャロフ(И. А. Гончаров)をそれぞれモデルにしているのは明白である。

では、作品のイデー、構成の面でこれほど重要な部分が何ゆえ1949年版13巻の本文から削除され、単なる「附録」として巻末に追いやられたのだろうか？ 同巻の注解者スカフトゥイモフ(А. П. Скафтымов)によれば、削除箇所を附録に掲げたのはもっぱらその無視できない分量を考慮してのことだという⁸⁾。質より量ということだろうか。スカフト

7) 『しのび声』と同じ頃に書かれたロマン『白亜の間の朗読会』は異称『エラトス書』《Книга Эрато》，その断片は「エラトス書の挿話」〈рассказы из Книги Эрато〉と呼ばれる。同じギリシャ語起源の語を用いた呼称の類似は、『しのび声』もまた独立した作品というより、ロマンの構成する一連の物語群のひとつであったと想像するに足る材料を提供してくれよう。すでに『物語の物語』でロシア版『千一夜物語』を構想していた作家は、複数の登場人物に主人公と語り手の機能を交互に分ち持たせることによって小説にさまざまな視点を導入し、「他者の視点の自己開示の自由」(バフチン)を保証しようとした。おそらく作家にはこの場合もそうした連鎖小説、オムニバス小説の遠大な構想があったのだろう。そして、仮説であるが、それが旧約聖書の「ヨブ記」〈Книга Иова〉や「ダニエル書」〈Книга пророка Даниила〉を思わせる「ソフィヤ書」, 「エラトス書」の題名にも表われていると考えられる。

8) Чернышевский Н. Г. Полное собрание сочинений в 16-х томах. т. 13, М., 1949, с. 912. 以下、同全集からの引用は、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で本文中に示す。

ウイモフが作家チェルヌィシェーフスキイ研究に果たした役割の大きさは誰も認めるところではあるが、『プロローグ』以外のシベリア時代の作品が「伝記的事実としての純粋に学問的な興味」(XIII, 886)しか有していないとまで言い切るのは、のちに明らかになるように、不用意すぎた。実は、この場合、注解者の手堅い歴史的事実主義が勇足を演ずるはめになったとの印象は否めない。

1871年1月12日、チェルヌィシェーフスキイは妻オーリガ宛の私信といっしょに、それまで書き溜めた作品——なかにはロマン三部作とよばれる『往昔』《Старина》、『プロローグ』、『白亜の間の朗読会』《Чтения в Белом зале》が含まれる——の「目録と但書」を送っているが、その №3 にはこう指示されている。

「『ある娘の物語』。鉛筆でしるしがつけてあるのは削除すべき箇所。小説はあたかも未完にみえよう。だが、その方がかえってモラルを吹き込むには好都合だ。削除箇所がなくてもモラルは理解される」(XIV, 507)

作家みずから創作史の不明な自作について語った唯一の事例であり、物語の結構を考えるうえで恰好の手掛りを与えてくれそうだが、これを字義通りに解釈して本文批評の絶対的根拠とするのはどうか。引用文にはチェルヌィシェーフスキイ一流の逆説が見え隠れしている。「モラルを吹き込む」、「削除箇所がなくてもモラルは理解される」というが、モラルを正面に据え、「人生に宣告を下す」小説の在り方、構成形式こそ当時チェルヌィシェーフスキイが懸命に回避しようとしていたものであった。すなわち、手法的には『何をなすべきか?』から遠ざかりつつ新たな手法の確立を構想していたのである。その見事な一例が、バフチン(M. M. Бахтин)がヴィノグラードフ(V. V. Виноградов)の著作『文学の言語について』《О языке художественной литературы》からの孫引として紹介し、「ほとんどポリフォニックな構想」⁹⁾と呼ぶ、『物語の物語』《Повести в повести》の序文のヴァリエーション(1863年)である。

「愛のない小説を書く——女性のまったく登場しない——それは至難の業だ。だが私にはより一層困難な仕事で自己の力を試してみたいという要求があった。つまり、私の個人的関係ばかりか、私の個人的共感のいかなる痕跡もとどめない純粋に客観的な小説を書くことである。……私のように強い確乎たる信念を持った人間には、シェイクスピアのように書くのが一番むずかしい気がしていた。シェイクスピアは人びとや人生を描くとき、登場人物たちが解決しようとしている問題について、自分自身が彼らの誰かと同じような考え方をしているという素振りを見せはしない。オセロは「イエス」と言い、イヤゴーは「ノー」と言う——が、シェイクスピアは黙っている。彼には「イエス」や「ノー」に対して自分の好嫌を表明する気持はない。当然のことだが、私の言っているのは手法のことであって才能のことではない。

……私は純粋に客観的な小説を書きたかった。どうやらそれは成功したようだ。私が誰に共感しているか探してみたまえ……諸君には探し出せまい。

9) Бахтин М. М. Проблемы поэтики Достоевского. 4-е изд., М., 1979, с. 76-81.
但し、バフチンの引用は原文通りではない。

……かくして私の小説にエピグラフの詩をつける。

Wie Schnee, so weiss,
Und kalt, wie Eis,
(雪のように白い
だが氷のように冷たい)¹⁰⁾

二行目は私のため。「雪白のごとき白」は私の小説、「だが氷の冷たさのごとき冷たさ」はその作者である」(XII, 683-684)

「氷のごとき冷たさ」で小説を書くことのむずかしさを十分自覚しながらも、チュルヌイシェーフスキイは作者の視点——政治的・思想的・道徳的立場——が直接介入しない客観的小説を構想し、ロシア文学にそれまで「まったく存在しなかった」新しい手法の確立に思いを砕いていた。そして、その新しい手法の創始者としての自負があった(『オネーギン』《Евгений Онегин》も『現代の英雄』《Герой нашего времени》もまったく主観的な作品だ)。作者の立場を論理的に解説することを拒絶し、作者の美学的原理の「示威的露出」¹¹⁾の解体を志向していた彼が、小説の構造を破壊してまでモラルを強調するはずはなかった。したがって、「小説の結末部分の削除は……作品の基本的イデーから読者の目をそらせてしまった歴史的・文学的素材の過剰によって説明されうる」¹²⁾とするニコラーエフ(М. П. Николаев)の見解は的外れであり同意しかねる。

それに、「目録と但書」にいう「理解されるモラル」とはいかなるモラルなのか、また誰によって理解されるのか? この疑問は前記「外挿部」を注意深く読めばたやすく解決できよう。削除された箇所つまり「外挿部」がなくても明白なモラルとは、『ある娘の物語』第1章の朗読が終了した時点で、「保守的傾向の作家」オヌーフリエフが「わけなく予想される大団円」を前にして引き出した道徳的モラルのことである。彼は中断された手記の続編を書くようにとのソフィヤの依頼に答えて言う。

「無理です、ソフィヤ・ヴァシーリエヴナ。私にはこんなに分別くさいむだのない書き方で続きを書けそうにもありませんから。愛、熱狂、詩情——それがあってこそ御婦人方のあやまちも許されるのです。ところが、ここにはそうしたものが何ひとつないじゃありませんか。病気だの医者への指示だのを持ち出してみたところで、わけなく予想される大団円の道徳的弁明にはなりません」

「あなたがそれほどのモラリストだったとは思ってもみませんでしたわ。そんなに厳しくおっしゃるのでしたら、どうして小説なんかお書きになるんです? それより説教書をお書きなさ

10) ゲーテのバラード『コリントの花嫁』の一節の不正確な引用。ワイマール版、第1巻、1887年(リプリント版、三修社、1975年)によると当該箇所は *Wie der Schnee so weiß, / Aber kalt wie Eis*, である。なお訳文は、ゲーテ全集、第1巻、潮田出版社、1979年、山口西郎訳を拝借した。

11) Чернышевский Н. Г. Избранные произведения в 3-х томах. т. 3, с. 498.

12) Николаев М. П. Художественные произведения Н. Г. Чернышевского, написанные на каторге и в ссылке. Тула, 1959, с. 146.

いな」

「詩情のためなら道徳が忘れ去られるのもいいでしょうが、今も言ったように、ここには詩情がない。したがって許しもありえないのです」

オヌーフリエフは愛も熱狂も詩情もない散文的な生活と「父や母の偏狭で通俗的なモラル」に囲まれて育ったリーザが、精神と肉体の病から逃れるために「生活を変える」——彼に言わせると墮落してゆく——のを厳しく断罪する。もちろん、リーザにおける「生活の変革」は彼の考えるようなものでなかったことは言うまでもない。が、彼にはそれが見通せなかったし、「分別くさいむだのない書き方」——実は「思慮深い経済的な書き方」〈*рассудительно и хозяйственно*〉（氷のように冷たく）——や、モラルと説教をこれみよがしに露出しない新しい文学の可能性が理解できなかった。「モラリスト」の早とちりは、例の「炯眼な読者」（『何をなすべきか？』）を彷彿させる。こう考えてくれば、「目録と但書」の「削除箇処がなくてもモラルは理解される」という行文に作家特有の痛烈なシニズムを読み取ることも可能であろう。

ところで、チェルヌィシェーフスキイの目指す新しい文学的手法、作者の視点の直接的介入を認めぬ純粹に客観的な小説といえども作者の立場の不在はありえない。パフチンの言葉を借りるまでもなく、大体そんな小説は不可能である。これを要するに、作者の立場と容易に結びつく一定のモラルの不在もありえないことになる。なかんずくチェルヌィシェーフスキイのような作家にあっては、事実、「強い確乎たる信念」は彼のすべての小説に顕在化している。ただ、作家はその信念を作品の構造全体のなかで読者に感じとらせる、結論は読者自身に引き出させる——そのためのもっとも有効な手法を細考しているのである。いってみれば、チェルヌィシェーフスキイは、自分（作者）は確かに「他のどこか」にいるのだが「そこ」にはいない、もしくはいなかったという巧妙に仕組まれた *alibi*（現場不在証明）を手に入れようとしていた。そこで、『物語』では終始リーザに語らせ、「外挿部」では『オセロ』の作者同様、事実上、黙しているのである（無名氏の主人は論争に参加しない）。だが、この小説が示すことになるであろうモラル——作者が高所から説くモラルではない！——は、むしろ構造化されているのであるから、「外挿部」を切り離しては読者に伝わらない。というのは、例えば「わたしは兄のテーブルから一枚のポートレイトを手にとりました。……人びとがわたしのなかに見出すのは勇敢な永遠の友でしょう。決して軽率な娘ではないでしょう」という『弁明』《*Оправдание*》なる一節、女主人公の性格付けの点でもきわめて重要な部分が他ならぬこの「外挿部」『第一夜』に含まれているからである。もっとも、この『弁明』は1978年版にのみ存在し、他の版には欠けている¹³⁾。

13) См.: Неопубликованный отрывок из повести Н. Г. Чернышевского «История одной девушки». «Русская литература», 1970, № 2, с. 125–126.

さて、いまや文学的手法の面からも、また作品の構造の面からも、「削除箇処がなくてもモラルは理解される」という作者の「但書」は、削除の動機付けとしてあまりにも不十分であることが明らかになった。

それでは、作者はなぜ物語の整合性を無視して、しかもそのことを十分承知しながら（「小説はあたかも未完にみえよう」）、削除の指示を決意したのだろうか？ いかにも『ある娘の物語』の末尾の数行は不自然であり、作為の跡がありありとしている。

「ここで原稿は終っている。なぜ、リザヴェータ・アルセーニエヴナ・スヴィーリナと名のある娘は自分の病の顛末を中断してしまったのか？ 私はそれをいつの日か語り聞かせよう」

局外者である「私」¹⁴⁾＝語り手の登場はあまりに唐突である。チェルヌィシエフスキイの肉筆原稿を仔細に検校したコノヴァーロフ (В. Н. Коновалов) は、この改作部分の作者の筆跡が他の部分——削除されずに残った部分——に比べてきわめてぞんざいであると報告している¹⁵⁾。そしてその原因を、原稿を送付する直前に大急ぎで書き加えられたためだと推定する。また1978年版の注解者ルデーニコ (Ю. К. Руденко) も、他の部分には細部にかかわる個々の訂正箇処があるものの創作的改作の跡はないことから同様の結論に達している¹⁶⁾。さらには両者とも、この改作および削除がもつばら当局の検閲を予測した自己検閲の結果であるとして次のように言っている。

「小説の原稿とその内容を分析すれば、作者の削除指示は文学的理由によるのではなく、検閲を考慮してなされたものであると結論せざるをえない。われわれはチェルヌィシエフスキイが自作の公表をしきりに願っていたことを知っている。彼は「無害の」作品においても読者に自分の見解を伝えようと確信していたが、同時に、自分が作者であることを公然とさらけ出すようなものは一切排除したかったのである」¹⁷⁾

「そうした改作〔当初のテキストの単なる量的縮少のこと——長野〕を無条件に容認すべきではない。また、削除されたテキストを作者の構想に合致しないもの、作家の創作上の要求に適わなかったものと見なすべきでもない」¹⁸⁾

なるほど、両者の結論は、作家の諸作品の時に遇わぬ歴史に通じている者には凡庸だろうが、それは正しき凡庸というべきである。筆者には反証材料が見当たらない。

現に、「目録と但書」には他の作品に関する以下のような指示もある。

「ロシア語版ではヴォルギンの文学活動に関係する箇処はすべて削除すること」(XIV, 506)

あるいは、

14) 代名詞「私」は全集版では欠けている。

15) Коновалов В. Н. Из истории написания и публикации повести Н. Г. Чернышевского «История одной девушки», с. 288.

16) Чернышевский Н. Г. Избранные произведения в 3-х томах. т. 3, с. 513.

17) Коновалов В. Н. Повесть Н. Г. Чернышевского «История одной девушки» и русская литература 60-х годов XIX века. с. 9.

18) Чернышевский Н. Г. Избранные произведения в 3-х томах. т. 3, с. 513.

「必要に応じて改作，抹消してください。私はいっこうにかまいません。都合のいいように
[公表するために——長野]，その方がいいのです」(XIV, 507)

残された家族の経済状態を気遣い，刑期が終り次第——作家は具体的な年月日まで挙げ
て，近い将来かならず自由の身になれると本気で信じていた——文学活動を再開しようと
意気込んでいた チェルヌイシェーフスキイ のいつわざる心境であろうが，「いっこうにか
まわない」〈у меня нет амбиции〉わけでは決してなかった。作家としての自尊心を捨て
て去れるはずがなかった。「鉛筆で」しるしをつけたものも，おそらくそのためだったの
だろう。

以上のことから次の結論が導き出される。第一に，「目録と但書」にある削除の指示は
当時のチェルヌイシェーフスキイの文学的構想ばかりでなく，作品の構造的特徴とも不整
合であること，第二に，削除は検閲を考慮した結果なされたものであること——したがっ
て，われわれは作品外的，文学外的事実の強制によるヴァリントをしりぞけ，作家が書い
たまの形で作品を受容しなければならない。つまり，『ある娘の物語』のテキストでは
なく，『しのび声』のテキストをこそ作品分析の対象として選択すべきである。その際，
すでにこれまでも断片的に触れてきたように，1978年版を定本とするのがもっとも妥当で
あると思われる¹⁹⁾。

2. 心理主義と主人公の性格付けにみる示差的特徴

中編小説『しのび声』には，1) 家庭や社会における女性の地位，女性の自立・解放を
初めとするいわゆる「婦人問題」〈женский вопрос〉，2) 革命的民主主義の世界観の形
成過程，3) 「新しい人びと」〈новые люди〉と旧いモラルの擁護者の対立（「父と子」
のテーマ），4) その帰結としての小市民的道徳の否定，5) 「余計者」〈лишние люди〉の
タイプの歴史的意義²⁰⁾（「ランデヴーにおけるロシア人」〈русский человек на rendez-
vous〉）など，いくつかの重要なテーマが存在する。これらはチェルヌイシェーフスキイ
の諸作品に遍在するテーマであるとともに，同時代のロシア文学に共通の「個人と社会」
というより普遍的なテーマに包摂されようが，第2章の目的はテーマそのものの考究にあ
るのではない。いわば個々のテーマを横目で睨みながら，作者がテーマの具象化に際して
用いた主導的方法のひとつである心理分析の方法，つまり心理主義〈психологизм〉と，
それに直接関係する主人公の性格付けの示差的特徴を検討することを主眼とする。

19) 同版でも1949年版同様，削除箇所は便宜上附録として巻末に収録されているが，注解者は『し
のび声』を「完全版」とみなしている。

20) チェルヌイシェーフスキイを含む革命的民主主義者の創作における余計者の問題については，
例えば，Прокшин В. Г. Проблема «лишних людей» в творчестве революционных
демократов. 《Учен. зап. Башкирского университета》，вып. 17, 1964, を参照されたい。
この論文では，『ある娘の物語』についても言及がある。

チェルヌィシエーフスキイが「無害の」、「純粹に心理的な内容の」(XV, 407) 小説を書くに至ったのは単なる偶然でも、また「創作エネルギーの捌口を見出しうる形式をやむにやまれず探し求めた」²¹⁾ からでもなかった。作家自身の内部で人間の心理、人間の内面生活に対する深い関心が創作と結びつけられるのは、ジャーナリストとしての活動を開始するはるか以前のことであった。他の所でも述べたように、すでに若き日のチェルヌィシエーフスキイの読書体験(「投象的読書法」)や「初期三部作」に人間心理の鋭い洞察力のポテンシャルが存在していた²²⁾。それは、独特の構成原理のなかに芸術家チェルヌィシエーフスキイが顔をのぞかせる評論についても同じである²³⁾。例えば、『県の記録』《Губернские очерки》(1857年)——シチェドリ(М. Е. Салтыков-Щедрин)の同名の作品に関する評論——で、評者は「われわれにはシチェドリが示す諸タイプの純粹に心理的な側面にすべての注意を集中するのがはるかに興味深く思われた」(IV, 301)と述べている。ちなみに、評論といえば、トルストイ論『幼年時代および少年時代』・『軍隊短編小説集』《Детство и Отрочество》・『Военные рассказы』(1856年)を抜かずわけにはいかない。当時、新進気鋭の作家だったトルストイ(Л. Н. Толстой)の才能の諸特徴について論じた論文中、白眉は心理描写に関するくだりである。このあまりにも有名になりすぎたがゆえに実質が空洞化し、ややもするとステレオタイプ化された「魂の弁証法」〈диалектика души〉という術語だけが一人歩きしかねない論文を、われわれは原テキストの文脈に引き戻して読むことから始める必要がある。というのも、論文は、それまでのどちらかといえば作家の直観的洞察力によって支えられてきた人間心理の探究に、一定の理論的根拠を与えたからであり、彼の文学における心理主義の本質を解き明かす有力な手掛りを与えてくれるだろうからである²⁴⁾。

チェルヌィシエーフスキイは言う、

「トルストイ伯の注意は何よりもまず、いかにしてある感情や思想が別の感情や思想から展開されてくるかということに向けられる。彼にとって興味深いのは、所与の状況や印象から直接生

21) Скафтымов А. П. Сибирская беллетристика Н. Г. Чернышевского. в кн.: Нравственные искания русских писателей. М., 1972, с. 338.

22) 拙稿「チェルヌィシエーフスキイの文学修業時代」、ロシア語ロシア文学研究、第14号、1982年、p. 11-12を参照されたい。

23) チェルヌィシエーフスキイの評論における芸術性をプールソフは高く評価している。Бурсов Б. И. Мастерство Чернышевского-критика. Л., 1959.

24) ここでチェルヌィシエーフスキイの作品研究において注意すべき問題が生じてくる。理論と実践、つまり彼の美学理論・文学理論と芸術作品の複雑な相関関係に係る問題である。彼の芸術作品はしばしば「彼自身の美学理論の一種の芸術的解釈とみなされ、その芸術的手法の特徴分析は、芸術的〈実践〉の諸側面を、それに対応する美学理論の命題と直接比較することによってなされている」(プールソフ)との警告は一考に値する。実証主義の名に隠れた独断論に陥らないためにも、この問題には慎重に対処しなければなるまい。(См.: Бурсов Б. И. Некоторые особенности художественного метода Н. Г. Чернышевского. «Статьи, исследования, материалы», т. 1, Саратов, 1958, с. 155.

じる感情が、思い出の影響や想像が描き出すさまざまな連想の力に屈しながら、いかにして別の感情へと移ろい、ふたたび以前の出発点に戻り来たり、さらにふたたび思い出の連鎖をくまなく辿りながら変転しつづけてゆくかを観察すること、最初の感覚によって生み出された思想がいかにして別の思想へと導かれ、さらに先へと惹かれていって、夢を現実の感覚と、未来についての空想を現在についての反省と融け合わせてゆくかを観察することである。……トルストイ伯は何よりもまず心理過程そのものに、その形式に、その法則に、明確な術語で表現するなら、魂の弁証法に関心をもっている」(III' 422-423) [下線部引用者]

ここでは、論者が最大級の賛辞を惜しまないトルストイの心理分析のふたつの側面に注目したい。ひとつは、内的生活を生成・自己運動の発展過程において、ひとつの事象が他の事象と相互に関係しながら非直線的に発展する諸過程において捉える弁証法が基礎にあること、他のひとつは、心理分析の対象が感情だけではなく思想にもおよんでいることである(チェルヌィシェーフスキイにおける「心の詩」〈поэзия сердца〉と「思想の詩」〈поэзия мысли〉の同位²⁵⁾を想起されたい)。論者の指摘する「分析的・解說的心理主義」²⁶⁾は「魂の弁証法」のみならず「思想の弁証法」の上に構築されたものでもある。心理体系とイデオロギー体系の交錯する場で人間の内的生活が営まれるとの認識は、チェルヌィシェーフスキイにとってきわめて重要な認識のひとつであった。

さらにつづけて論者はこうも言っている、

「……心理分析は創造的才能に力を与える性質のうちでおそらくもっとも本質的なものである。だが、ふつう心理分析は、こう言ってよければ、一定の動かない感情をとりあげて、それをいくつかの組成部分に分解し、さらにこういう表現が許されるならば、われわれに解剖図を示すのである。われわれは、偉大な詩人の作品には、こうした側面以外に、もうひとつの傾向があることに気づいている。それが現われると読者や観客に実に驚嘆すべき作用をおよぼす傾向である。それはある感情から他の感情への、ある思想から他の思想への劇的な移行を捉える傾向である」(III, 425)

すぐれた心理分析は、対象をすでに出来上ったもの、結果が示されたもの、静的なものとして捉えるのではなく、変転するもの、ある段階から他の段階へつねに移行するものとして、そのダイナミズムのうち捉えうる装置でなければならないというのである。論者は、「精神生活の変動的原理と安定的原理の新たな関係の発見」²⁷⁾をトルストイの功績とし、そのよってきたるところを、自分自身のうちに人間を研究する自己省察に求めている。これもまたチェルヌィシェーフスキイ自身の文学的、思想的体験から導き出されたものである。

このような心理分析によせる関心の深さ、チェルヌィシェーフスキイ自身の言葉を借りるなら、心理分析への偏愛にも等しい愛着が、彼の創作活動に少なくとも間接的な形で

25) 註22) 拙稿, p. 18 を参照されたい。

26) Гинзбург Л. Я. О психологической прозе. 2-е изд. Л., 1976, с. 271.

27) Там же.

反映されているであろうことは十分予想しうる。いくつか例示してみよう。ロプホーフ（Лопухов）とヴェーラ（Вера）の出会いの場面での内言語の利用、心理分析の深さと鋭敏さを基準とする主人公たちの文学作品評価の在り方、登場人物としての作者とロプホーフがともに認めるいわゆる利益算出理論（理性的エゴイズム）の心理分析への応用性、キルサーノフ（Кирсанов）とロプホーフの「二重の対話」〈сдвоенный диалог〉²⁸⁾、「偉大な心理の洞察者」〈великий психолог〉ラフメートフ（Рахметов）のクライマックスにおける出現、芸術性の解釈のみならず心理分析の点でも「呑込の悪い」炯眼な読者像、新しい人びとに対立する副次的人物群の心理の解剖、ヴェーラの夢とくに第三の夢の心理的葛藤（以上『何をなすべきか？』）、虚構の私＝語り手とリザヴェータ・アントーノヴナ（Лизавета Антоновна）の対話の心理的意義付けおよびそれに関する読者への訴え（『アルフェーリエフ』《Алферьев》）、語り手と主人公の相互交換による心理の多層的自己開示の手法（『物語の物語』）、レヴィーツキイ（Левицкий）の日記（『プロローグ』）——これらの諸例はそれぞれチェルヌィシエーフスキイにおける心理分析の諸相とそれ自体としての重要性を雄弁に物語っている²⁹⁾。

主人公の内的世界の分析によって主人公の性格付けを行ない、個人の心理的過程を描くことによって個人の自意識を実現し、世界に対する個人の関係を表現する心理主義は、なにもチェルヌィシエーフスキイに限られるものではないし、社会生活におけるイデーの役割の増大にともなって、個人の心理と行動における思想の役割も増大するという歴史的・社会的現象を覚知し、それを芸術的に分析してみせたのも彼が最初ではない。このような心理主義は、「リアリズム様式が形成された時点からロシア文学の指導的方法となった」³⁰⁾のである。その事情を確認するには、トゥルゲーネフ（И. С. Тургенев）、ドストエーフスキイ（Ф. М. Достоевский）、トルストイら同時代作家のロマンを列挙するだけで十分だろう。

では一体、チェルヌィシエーフスキイの心理主義が他と区別される示差的特徴とはいかなるものなのか？ チェルヌィシエーフスキイは心理分析がとりうるいくつかの傾向、作家の関心を惹く心理分析の諸側面として、1)人物の性格の輪郭、2)社会的諸関係や日常生活上の衝突が人物の性格におよぼす影響、3)感情と行為の関係、4)情熱の分析、5)心理過程そのもの、その形式および法則、すなわち「魂の弁証法」——以上5つを挙げて類型化を試みている（III, 422-423）。だが、これは体系化された理論ではない。用語自体が一義

28) Прокшин В. Г. О своеобразии психологического анализа в романах Н. Г. Чернышевского. 《Н. Г. Чернышевский. Статьи, исследования и материалы》, т. 5, Саратов, 1968, с. 107.

29) ソヴェート文芸学史におけるチェルヌィシエーフスキイの心理主義を含むポエティカに関する研究成果については、Гуральник У. А. Наследие Н. Г. Чернышевского-писателя и советское литературоведение. М., 1980, с. 119-189 に詳しい。

30) Лотман Л. М. Реализм русской литературы 60-х годов XIX века. Л., 1974, с. 169.

的ではなく、条件的・約束的であり、各辞項の相互関連性が不分明である。また、一見して明らかなように、各辞項は相互排他的ではなく相互補完的である。したがって、任意の作家の心理分析において各辞項のうちどれが優位を占めるかを決定したところで、本質的には、示差的特徴を示すことにはならないだろう。チェルヌィシエーフスキイのすぐれた発見である「魂の弁証法」といえども、具体的芸術構造（作品）におけるその機能的側面を無視して援用することは断じて許されるべきではない。

一般に、「心理分析は多様な手段を利用する」³¹⁾。それは、ある場合には、作者自身あるいは虚構の語り手による直接的思弁の形式において、もしくは分析の対象である主人公自身による意識された自己分析の形式において実現される。またある場合には、意識下の世界あるいは言語外的現象を描くことによって実現される。心理分析は、対話、独白、内的独白、伝聞、夢、空想、書き言葉（日記、書簡、回想録など）、身振り、行為、さらには自然描写において実現される。書簡体小説は対話形式を必然的にとまなり、独白は自己—自己の対話、回想録や日記は時間的へだたりの大小を抜きにすれば現在の自己—過去の自己の対話と考えられる。身振り・行為・自然は記号化・ことば化されることが明らかになっている——すると、ここでもまたおのおのの手段は相互排他的というよりも相互補完的であって、任意の手段の選択を示差的特徴の根拠とするわけにはゆかない。それに、これらの手段はロシア文学にとって既知のものであった。以上のことを前提としたうえで、『しのび声』における心理主義とヒロインの性格付けの示差的特徴を考えるべきである。

『しのび声』は、心理分析がとりうる傾向に関しても、また心理分析が実現される手段に関しても、多様性に富んでいる。確かに、基軸となるのは日記の形式をちりばめた手記によるリーザの精神的軌跡の描写であるが、それを支えている手段、ならびにその手段によって実現される心理分析の対象範囲は多面的かつ広汎である。

物語の序説的説明部〈экспозиция〉では、情緒的・感情的・ロマン主義的要素を一切締め出した事務的語り口で、ヒロインと狭小な社会、分別とつつまじやかな小市民的道德観の支配する社会との表向きには安定した関係が提示される。だが、個人と社会の安定的関係を背景にしたリーザと母親の対話にみられるヒロインの動揺——大きな安定のなかの小さな不安定——は、すでに劇的效果を内包している。生れ育った社会の道德律に従わなければならない、分別ある娘でなければならないという義務感にしがみついている意識と「掟」に逆らう無意識との心理的相剋、ヒロインにおける外的・社会的生活と内的生活の対立を暗示している。ここでは、まだこの対立を思想と行動の対立にまでおしすすめて図式化することはできないだろうが、周囲の人びとの意見のみが行動の指針となっていたリーザにとって、自分でも思いがけない花婿の拒絶は、彼女自身に「思想」と行動の乖離を

31) Гинзбург Л. Я. О психологической прозе. с. 330.

予感させるのに十分であった。「ごく平凡なお嬢さん」〈кисейная барышня〉が、無意識の状態から意識の状態へ、本能的知覚から理性的認識へ、古い世界から新しい世界へと精神的成長を遂げてゆく過程を漸次移行の方法〈прием градации〉と対比法を用いて描出するのは『何をなすべきか?』で発見された文学的手法である。

不安な予感は空想と夢のなかで増幅される。静かに流れる、良識のあるつつましい生活によって吸収されつくすことのなかったヒロインの精神的エネルギーは、読書体験を経て、空想や夢のなかで消耗されつつある。それぞれ脈絡のない断片的な場面の数々、次から次に浮かんでは消えてゆく情景、時間的・空間的反复あるいは逆戻りはシンボリックな世界を構成している。「これは、人間の内部で、本人が意識したくない感情、現実の世界において本人が怖気をふるいながら押しつけている感情がいかにして目醒めるかということの正しい分析だ。しかし、制御をつかさどる意志が眠っているところ、夢の存在するところでは、感情を捉えたものが発生するのである」³²⁾ というヴェーラの「第三の夢」についての解説がリーザの夢についても当てはまる。夢にあるのは意識の流れではなく、自然発生的な感情の流れ、意識下の世界であるが、これを「魂の弁証法」の一例として理解することは可能である。作者は夢を夢として描くのではなく、夢を現実と立体的に交錯させて、詳しくいうなら、手記を書いているいま、手記に書かれているいま、手記で回想されるいまの視点を複数の夢や空想の間に挿入して描きながら、夢と現実を接近させている。それが、主人公にとっても、読者にとっても、夢や空想が現実を理解する装置になりうるゆえんである。ヴェーラの場合がそうであったように、夢は現実のリーザの精神生活の結節点になり、ひとつの時代を画するという機能をもつ。夢の世界の舞台は、名も知れぬ抽象的な場所から、プーシキン(A. C. Пушкин)の無題詩の舞台、グヴァダルキヴィル川を臨むセビリヤの町へ、さらには『ロメオとジュリエット』のヴェロナへと変化し、ついには現実のヴォルガ河畔の町になる。それにともない、恋する若者のぼやけた輪郭が鮮明度を増し、やがてラチーノフの姿に重なってゆく。ここで、「リーザの精神的発達の第一段階が終るのである」³³⁾。

コノヴァーロフによると、ヒロインの精神的発達の第二段階はラチーノフに対する幻滅であり、それは夢の破綻であると同時にヒロインの新たな段階への移行、つまり自分が置かれた立場の社会的被制約性を理解し始めるということの意味する。正しい指摘であろう。ラチーノフとの出会い——対話、伝聞、書簡が利用される——によって、リーザは分別豊かな社会、小市民的道徳の卑俗さ、月並みさを意識し、「善良な」人びとの巢から飛び立

32) Луначарский А. В. Собрание сочинений в 8-ми томах. т. 1, М., 1963, с. 249.

33) Коповалов В. Н. Особенности психологического анализа в повести Н. Г. Чернышевского «История одной девушки». «Проблемы русской и зарубежной литературы», вып. 4, Ярославль, 1970, с. 171.

とうとする。「余計者」のテーマに詳しく触れることはここではしないが、ただ次の点だけは強調しておきたい。ラチーノフに対するリーザの関係はロシア文学の新しいページを切り開いた。リーザの心理分析は、ラチーノフを救おうとする手紙や、ラチーノフに対する幻滅のあとも、生活から逃避することもせず、かといって古い生活に戻ることもしない彼女の行動において実現される。これを、例えば『貴族の巣』《Дворянское гнездо》のリーザ(Лиза)や、『アーシャ』《Ася》のアーシャ(Ася)、『家庭の幸福』《Семейное счастье》のマーシャ(Маша)の行動と比較してみるなら、彼女と他の三人のヒロインとの性格付けにおける差異は明らかだろう。チェルヌィシエフスキイは作者の立場ではなく手法の露出を行なう。彼は敢えて類似の情況設定——リーザと余計者ラチーノフの「ランデヴー」、リーザと余計者ラヴレーツキイ(Лаврецкий)あるいはアーシャと余計者「私」の「ランデヴー」——や、類似の心理分析の手段——回想録の手記の告白体——を示すことによって、ヒロインの行動心理の特殊性を明示する。彼は「生活においても、文学においても、個人の心理の特性は安定した類型学的特徴を背景にした示差的特徴として把握される」³⁴⁾という理論的命題を先駆的に実践してみせたといえよう。『しのび声』の心理分析は個性化の原則に貫かれており、「新しい人びと」の心理分析にみられる典型化の原則とは無縁である。やや図式的な言い方を承知でいうなら、ヴェーラ、ロプホーフ、キルサーノフは共通の行動原理(理性的エゴイズム)から出発するため行動様式が定型化する。ロマンの作者の立場が、あるいは作品の時代設定がそれを要求したといえる。だが、リーザの心理は「新しい人びと」——この呼称自体が典型性を物語っている——の心理と異なり、あくまで特殊的、個別的である。「外挿部」で批評家が言うように、それは同胞の「手本」にはなりえないのである。

さらに、チェルヌィシエフスキイの心理分析におけるいまひとつの重要な示差的特徴を指摘しておかなくてはならない。それは、心理分析が生理的側面からなされていることである。『しのび声』は出口を探し求める生理的欲求の声である³⁵⁾との見方は誇張にすぎないが、生理学が心理分析に果たしている役割は大きい。チェルヌィシエフスキイはヒロインを肉体をもたない天使に作り上げようとはしない。ここには彼の人間学が大いに与かっている。論文『哲学における人間学的原理』《Антропологический принцип в философии》では彼は心理学・生理学の分野における学問的成果に触れて、

「自然科学は精神の問題の正確な解決のために数多くの材料を提供しうるほどに十全の発達を遂げた」(XII, 258)

「精神の世界のすべての現象は互いに起源をもち、因果律に従って外的環境から発生することがまったく明白である。そしてこれに基づいて、ある現象が先行する現象および外的環境に由来

34) Гинзбург Л. Я. О психологической прозе. с. 19.

35) Скафтымов А. П. Нравственные искания русских писателей. с. 330.

せずに発生するという一切の仮定は偽であると認められたのである」(XII, 260)

と述べている。彼は因果律の観点から、人間のオルガニズムの統一性を説き、精神と肉体の二元論を否定する。おそらく、ロシア文学において他に類をみないであろうリーザの生々しい生理的体験は作者のこうした科学的認識から生み出されたのであろう。リーザは自分を取り巻く社会の後進性、停滞性を自覚し、自分と社会の新たな関係を意識し始めたのちも、内的生活を解放するには至らなかった。彼女はストラスチ *страсть* の影に怯えつづける。ここでのストラスチとは情熱でも熱狂でもない。性的情動と読むべきである。もちろん作者は、性的欲求を自然な欲求とみなしていたが（青年チェルヌィシエーフスキイの「日記」を参照されたい）、その発露を描写の直接の対象としているわけではない。あくまで心理分析の手段のひとつとして用いている。環境決定論者チェルヌィシエーフスキイは——「人間はある事情の下では善となり、他の事情の下では悪となる」(VII, 264)——人間の自然な欲求や感情を歪め、押し殺す社会の在り様を問題にしているのである。したがって、リーザが未婚の母になることも性の解放も、すぐには女性の解放と結びつかない。ここでもまたリーザの体験は「手本」になりえない。

しかし、『ある娘の物語』の特殊的・個別的なリーザの心理描写は「外挿部」で60年代の革命的民主主義者を読者・批評家としてもつことによってより広い社会的心理と結びつけられていることを看過してはならない。若い批評家は、「思慮深さと意志の強さ——これこそ女性であれ、男性であれ、また娘であれ、未亡人であれ、人生の幸福にとってさらに大切な条件です。強い意志をもった人間は破滅しないでしょう」と語っている。もし「手本」を探すなら、もし作者からの秘められた訴えを見出そうとするならこの一節こそがそれであろう。これは、高邁な道徳的原則のために行動し、行動のひとつひとつをはっきり自覚している申し分のない強い意志をもった人間の性格分析が中枢を占めるモノグラフ『大脳と反射』《*Рефлексы головного мозга*》(1863年、奇しくも『何をなすべきか?』の発表年と同一である)の著者セーチェノフ(И. М. Сеченов)の主張——「人間はあらゆる本能に抗して行動することができる。なぜなら本能の声は、真理や人間愛が与えてくれるよるこびの燦然たる輝きの前では生彩をなくしてしまうからである」³⁶⁾——と呼応し、『哲学における人間学的原理』の主調音とも共鳴する。その意味で、精神的、肉体的危機にあって母親を責め立てたヒステリックな叫び声と好対照をなす『弁明』の「わたしは人間です」という自信に満ちた無罰的な調子は、『しのび声』のプロローグにふさわしい。

1985. 4. 5

36) Прокшин В. Г. О своеобразии психологического анализа в романах Н. Г. Чернышевского. с. 104.